

繋ぐのは命

坂東 元

旭山動物園 園長

命は大切、このことばを否定する人はいないと思います。だけど私は「命が大切=生きていることが大切」なのではなくて、「生き方」が大切なのだと感じます。命は誕生した時から死で終わる運命です。治療しようが延命しようが必ず死は訪れます。誕生も死も病院で営まれるようになり、日常ではなく特別なことのようにとらえられがちで、身近で目にする、感じるができなくなっています。死はマイナスのイメージがつきまとうようになりましたが「死を大切」にできなくて「命を大切」にはできないとも感じます。命とは、誰にでも等しく宿るのだから生きてるうちは生きるという実にシンプルなものだと思います。

私たちヒトは、地球上のすべての生き物の中で、ただ一種だけに通用する価値観、ルールを作り上げ、全く異なる生き方をしています。医療もその一つでしょう。そしてヒトはすべての生き物の中で一番すぐれている生き物なんだとどこかで思っています。その中でただ一種だけが無限とも思える勢いで増え続けているという一面があります。

ではヒト以外の命はどのように生まれているのだろうか？食物連鎖と言う言葉があります。食物連鎖は命の連鎖、バトンタッチです。死が必ず生に受け継がれ、何一つ無駄になるものはありません。たくさんの死があるからたくさんの命が輝くのです。すべてが循環しているから、何も足さないのに春になると木々が緑に被われ、虫たちや小鳥たちが命を育みます。多種多様な生き物が空間を共有して生きている、命を奪う側奪われる側の生き物が同じ空間で生きている。それは仲良くではなく、認め合うことです。私が動物たちを常に素晴らしいと感じるのは、自分にとって不愉快な存在でも存在を認め合えることです。

しかし動物園の動物たちは、食物連鎖の環から持ち出された野生動物として存在しています。ある意味終わるタイミングを失った命です。病気、医療という概念を持たない動物たちですが、ヒトの生命観の中で一生を過ごすこととなります。ここに関わる私たち、特に医療行為を行うことの葛藤が生じます。

安全これもすべての大前提のように言われるようになりましたが、絶対に良いことではない一面があります。高さが17メートルあるオランウータンの施設は、手を滑らせれば死に繋がる危険な環境です。でもその高いところを腕渡りする姿が生き生きとした姿として多くの来園者に感動を与え、オランウータンのペアの関係の強化、親子の絆の強化に繋がっています。

命は、常に次の世代につなぐために存在しています。今を生きるものが今をとりつくろふことだけを考えるようになっては、未来はありません。旭山動物園は飼育動物の命、地球の命を繋ぐことを目標に、日々の飼育に取り組んでいます。